

# クナシリ・メナシの戦いについて(5)

はじめに

今回も、新井田孫三郎が記した「寛政蝦夷乱取調日記」から、アイヌ側の証言を見ていきます。「あつけし(厚岸)」に着いた翌日の寛政元年(1789)閏6月28日に、すでに到着していた6名のうち、「のつかまふ(根室市近郊)惣長人シヨンコ、酋長達ノチクサ、ホロヤ、コヘカアイヌ」の4名を呼び出し、「くなしり騒動」の起こった訳を尋ね、その「口達」を記しています。今回は「のつかまふ」に着くまでです。

## 同様の証言

「久奈尻」支配人の内、南部大畑村の左兵衛が女夷を妻同様にいたし、その下々稼方の者共についても、ウタシは言うに及ばず長人共の女夷まで密通し、甚だ心外なので、少しでも彼らに對し「申出」ると、かえつ

て「非分」の申し掛けに逢い、遂に「ツクナエ」沙汰となつてしまつので、いづれも募つて申し出る事は致しかねました。

## 「不随不動」の場合

また、「クナシリ(国後島)」に稼ぎに行つた者共の申すには、銘々が好き勝手に「不随不動」があつた時は、当所(クナシリ)は勿論「メナシ(目梨)」地方についても釜を3つ用意し、一つ目は長人らを、又一つは女夷を、又一つは「ハカチ共(若者)」を残らず釜へ入れ、糟にして絞め殺すと申しました。扱又「のつかまふ」に殿様を一人拵え置き、「若江戸殿様」より「えぞ共」の人数が非常に少なくなつた理由を尋ねられた時は、長人共をはじめ「面立たる夷」は残らず病死したので、「唯今」は「若輩の蝦夷とも」との取引になつたことで、「御

軽物」(鷲尾・毛皮など、藩主が直接取引を行つてた品)などは一向に出て来ませんと「のつかまふ」殿様に挨拶していただくからと「蝦夷共」に言い聞かせ、日々引き寄せられ使われていました。扱又、手当て雇われていても、いたつて僅かであつたので、小刀一丁にも不自由でございませと共に、いよいよ難渋(貧困)になりましたと申し、仍て(今回の事件があつて)、当春からは「自分稼」で働くことが出来ると申ししておりました。

## 疑もなき毒害

サンキチの病死、マメキリの妻の急死(前回の「あつけし」長人らの聞き取りと同様の口達)について、蝦夷共申すには、支配人左兵衛が話したこの春から、ここの運上屋へ下げる米、酒、味噌に至るまで毒を入れると話した事と、「誠に前後死候夷に附合いたし」、「疑もなき毒害成」と申し

はじめ、数多の蝦夷は、同腹の上で殺害に及んだと伝え聞いています。



## メナシ領しべつでの横行

メナシ領「しべつ(標津)」では、シャンカクという娘がなにかと働きが良くないと、稼ぎ方の者に棒で強く打たれたところを助けて船に乗せ、我が家に連れ帰りましたが、間もなく果てたと伝え聞いています。

また、同所で稼ぎ方の者が密夫し、細かいことは聞き及んでいませんが、シルフという蝦夷の女夷タフツカルとチシニンカリ兩人は理不尽に密夫されたと伝え聞いています。(以下に、7つの場所で徒党に加わつた者の名が記される)  
以上が「のつかまふ」長人どもの口達で御座います

が、今後徒党の蝦夷共を召捕り、吟味しては如何かとの「筋合」もございまして、と記してあります。

## イニンカリを「のつかまふ」への供に

閏6月29日、イニンカリを呼び出し、昨日クナシリ行きを申し付けたが、「其方」が行かれては却つて徒党の者共が恐れてしまつので、先の申し付けを止め、「のつかまふ」への供を申し付けました。

7月2日、クナシリ行き、シモチ、ホロヤ、ノチクサ。メナシ行き、シヨンコ、コヘカアイヌ、ニサフロ、ハシタアイヌ。同様にし出船。

7月8日、「おつちし(根室市落石)」の沖に來ましたが、風が強く岬を通りかね引き歸し、「おつちし」へ昼九つ(12時)頃着き、そこから陸路で行き、難所があり昼から雨になり、山中で日暮れになりましたが、夜四つ時(10時)頃「のつかまふ」に着きました。